本朝生花活華源流

リ 4
4878

萬世泰平圖說

門り4 號4872 巻
門り4 號4878 巻

古今治革地圖叙

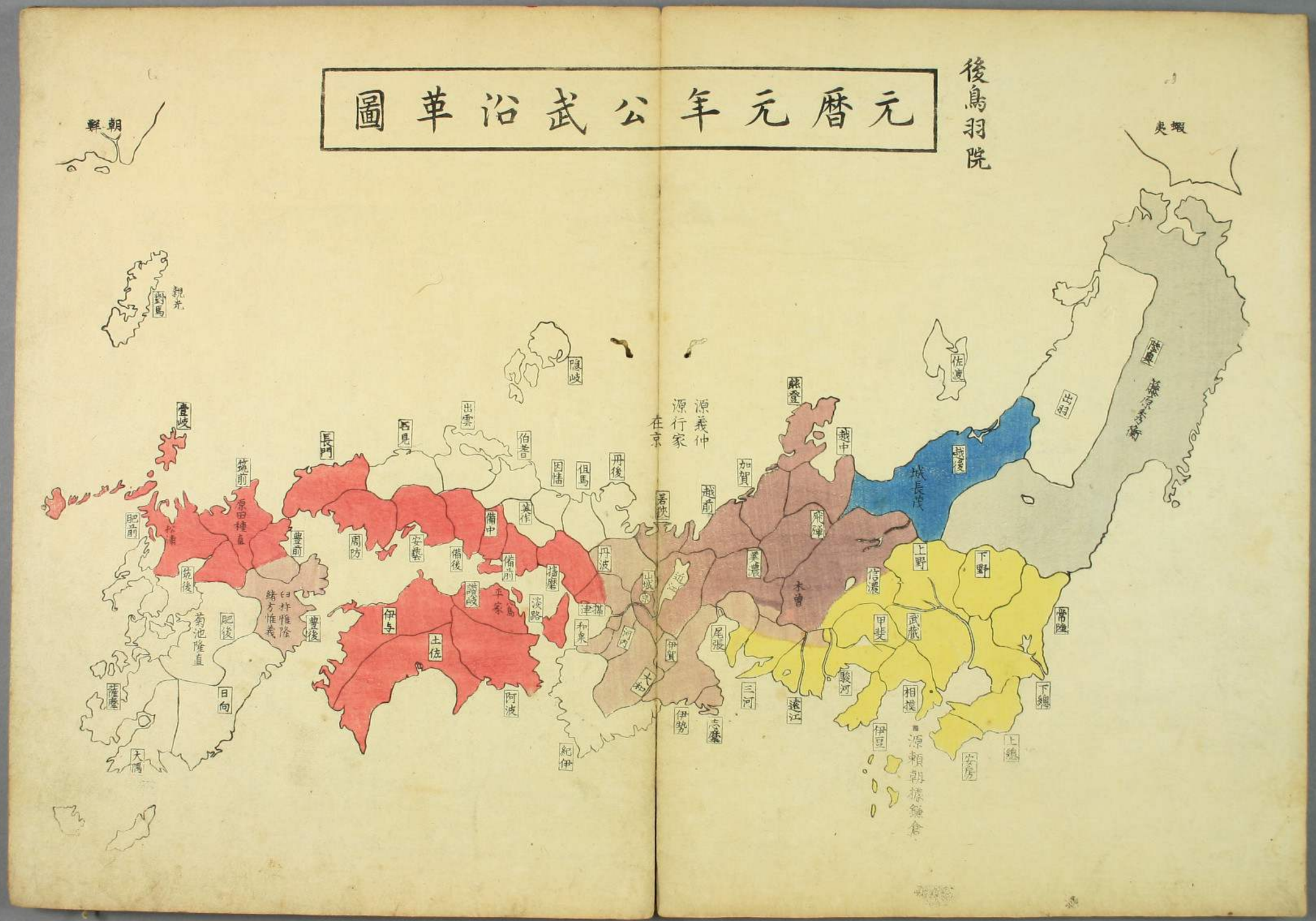
戰國割據之形。爭奪裂地之勢。誰能面視而自說之。今人生太平之世。耳聞而口能言之。亦唯一場談柄。永夜茶話而已。何足以感動人心乎。坦齋此圖。按地理。思時勢。猶足踏月覽。面接其狀。懷舊之念。感慨係焉。深切著明。何談過之。讀史者。不可一日無此圖。乃慫慂勸勉。上木行于世。予執友長久保赤水翁。嘗作漢土治革地圖。予已叙而行之。於此舉亦不可以無言。終附此語云。文化十二年乙亥秋日。水戸翠軒老人立原萬書

此書注古治革乃大有裨益。說之要也。地圖八枚。世多佚。此書要紀之求。諸國各領の地を彩色にて分別とせり。今日推して古へを見れば。なれど微細なる事は得がたし。且その彩色も梓に摺るに用ひるものなれば。小永正法治れ多くも。其の彩色を用ひるものなれば。すべて淡き色にて。大抵東西の隔てを而已用ひ。各領を書しても。一切名所等の如きは。悉く略かしたるなり。

元暦元年公武治革圖

往年保元平治の乱より後平氏ふ盛にして相国入道浄海兵
権を専にし天下を掌中に握り治承三年　後白河法皇を鳥羽殿に
閉じ執柄基房を流配し政務を恣にし源氏ふ流されて憤り怨
み沿仁親王　をそそのかして諸国の源氏に令旨を廻し平家を亡さんと謀る
しが遂ふ露顕し討手を大軍向しかば宮を始め頼政父子敗死せり元ふつき
諸国の源氏悉く討亡ぶべき風説いかしこを源頼朝兵を伊豆ふ挙げ源義
仲も信濃ふ起ふ近国郷村ぬく蹤し勢ひ既ふ盛りその外南海西
海の二道ふも孔蜂起せり○養和元年閏二月相国入道浄憲死す○源行家
尾州墨俣川ふて平家と戦ひ敗す同八月陸奥ふ奥州秀衡ふ勅して
鎮守府将軍ふ任じ秀衡命を受て○寿永元年城長茂を越後守ふ任じ義
仲と戦ハしめ小利ふ勝つ○同二年平惟盛等十万騎兵を率ひ義仲
を討ん加賀ふ向ふ戦ひ大ふ敗し北陸ふ義仲結ふ応して京都ふ向
行家を兵庫ふ遣す平内府宗盛　帝を供奉して西ふ走ふ後の諸
方悉義仲ふ靡ひ名れで攘夷ふ行宮を八鴻ふ設む○義仲東ふ
入ること　後白河法皇を再び政を聴ひ皇孫を位ふ即ける義仲
威を恃ふ○時ふ源氏四ふを攻滅し統世ふ原田種直を撃し
漸く山陽ふ及ぶ平氏四ふを十餘州を領へ八ふ勢ひを得ん始めて
も元ふ依く翌れで○元暦元年義仲出陣せ不その弦ゆく行家
を変ふ兵庫起ふ進む遂ふ引返す適頼朝ふ才能ある義経
を將ふ義仲を伐し義仲防戦し粟津ふ敗死ふ両將京ふ入る
を以て平氏を摂州ふ伐一ノ谷の城を陥す○文治元年平家滅ふ
破れ海ふ八鴻壇の浦ふ二戦ふ帝を始め宗族悉く亡ぶ是より国家の
大権悉く武ふ帰し其後頼朝追捕使を置し通貢を幕府ふ定め諸国を指
揮す○同五年奥州泰衡を討く奥州平く○正治元年頼朝薨し世
子頼家継ぐ小侯時政執権ふ治世久しうして終せれ外戚北条氏
官三公ふ昇ふ鶴岡別当公暁の子を為ふ害せらるるより後八政事
北條義時　時政の子　の専ふ帰ぬ

元暦元年公武沿革圖


後鳥羽院
朝鮮
蝦夷
親光
對馬
壹岐
筑前
原田種直
松浦
肥前
筑後
菊池隆直
肥後
薩摩
日向
大隅
豐前
豐後
臼杵惟隆
緒方惟義
長門
吾見
周防
安藝
伊与
土佐
阿波
讃岐
平家
備後
備中
備前
出雲
伯耆
因幡
但馬
丹後
隱岐
播磨
淡路
摂津
和泉
紀伊
丹波
山城
河内
大和
若狭
若狭
源義仲
源行家
在京
近江
伊賀
伊勢
志摩
尾張
三河
遠江
美濃
飛騨
越前
加賀
越中
能登
佐渡
出羽
城長茂
越後
陸奥
陸奥
奥州秀衡
木曾
信濃
上野
下野
常陸
甲斐
武蔵
駿河
相模
伊豆
源頼朝據鎌倉
下總
上總
安房

延元二年両朝並立圖

平義時朝威を怪しめけれど　後鳥羽上皇逆謀ありて遂会を傾覆しと謀り
のひしかども義時剛胆時房小長子泰時を待ちしく攻道よりを発せ
む皮軍たちまち破走　三院東文ふれ遠流に配流せらる義時いよく
暴横を恣にしが泰時賢明ふしく政務正しくさいを世のうちの士民
安堵せりやれより後は君臣相親ひて兵革やまぬ剛さへ蒙古は寇
襲ひ来れども我甲士の勇悍なるに　神霊の擁護ありしをも
賊船覆亡しく因ふれ海浪なる伐を吳朝の書にも記せるを後の
世の代にまりて長清秀武威福となせりと制すなるすべて政を
断く要へ老を恤ひ弱くを救ふの道　後醍醐帝皇子護良親王大塔の宮と恢
復を計ると雖あひしが行あく敗北しかるに遂れ潜し　帝笠置に移り
たまひしとは波羅勢ことを聞き落　帝を隠岐に移し奉る河内の
楠正成ひとり勅命をかりて兵を挙げ高時大軍を殺きし攻囲むに時
大塔の宮の令旨に依く諸国に義兵起り　帝は是を知と信ずる程に

中務忠弘将帥〻播磨の赤松円心先陣ふく京都に向ふ足利尊氏も
尤に加へり共に六波羅を攻る　関東勢と新田義貞兵庫に起し
けるに忽ち勢となり進んで通衢を奪落し言時ためし一族皆滅
亡す　帝復位あり天下ふたゝび皇室に帰る建武二年尊氏
鎌倉に極く上命に背き兄弟義貞を〻く征伐せむるに利あく
てうつる
延元元年東軍京師を逼る　帝ふれと遂く叡山に登る同二月
義貞尊氏を戦ひ敗く京師を復せる氏法師を〻を兵をいはり大軍
て上洛す勢ひ甚しく官軍敗績しを正成湊川に戦死す　帝かさ
称く台嶺を遁る　尊氏則光厳院の皇子光明院を立て建
武の年号を用ゆと雖皇師猶を保ちがたきより和睦を乞て
帝みやこに還幸ありしが尋て花山院を出奔る義貞一の宮
と称して越前に極く同十二月　帝復幸しく吉野に入るまとより南北
朝ふたり戦ひやむこと能はず

延元二年兩朝並立圖

南朝
後醍醐天皇

北朝
光明院建武四年

元中九年南北盛衰圖

延元三年小島法師宮新田義貞胡底沙果菊池武光等相戦死あり北朝
の兵勢ますます強し尊氏三男基氏を以て関東の総督とす○延文元年
尊氏没し世子義詮将軍の職を継ぐ此頃族て我が南朝を悩ませり
中にも義詮在職久しからず其嫡嗣義満いまだ幼稚なりとぞ
管領細川頼之能く老成補佐して南討西伐の威父祖に超ゆ肥後
の菊池武朝も力及ばず小島陸奥に住達南朝ありて推戴の恩を忘れといへども
時勢伊勢に小島陸奥に住達南朝ありて推戴の恩を忘れといへども
或ひは孤軍にして対抗し得るかは疑なり勤王党かも
衰に赴くまで
今年元中九年に当り足利氏大内義弘を以て南北和平の議を奏す○前
太政大臣従二位藤原朝臣実冬卿を総督長氏卿として後嗣の氏満を補佐
調ひ和れば同年十二月に帝京師に還幸あり北帝後小松院に宝位を
譲り給ひ三種の神器も授しめ給ひ小胡より太上天皇の号を奉
る元延元年二年を元中九年まで五十六年を流れて南北一統に及べり
実冬卿を総督長氏卿として後嗣の氏満を補佐ざるの為兼ねて此頃の我
が別なるを以て略す

元中八年に至り菊池武光の死せし後小菊池武光の死せし
征西将軍懐良親王後醍醐の皇子薨去の後泰成親王後村上の皇子を継ぎ
八代の宮又征西の宮とも称せり元中の末武朝北朝に降りし後
阿蘇大宮司に命ありて元中十年に紀せりその朝に云く

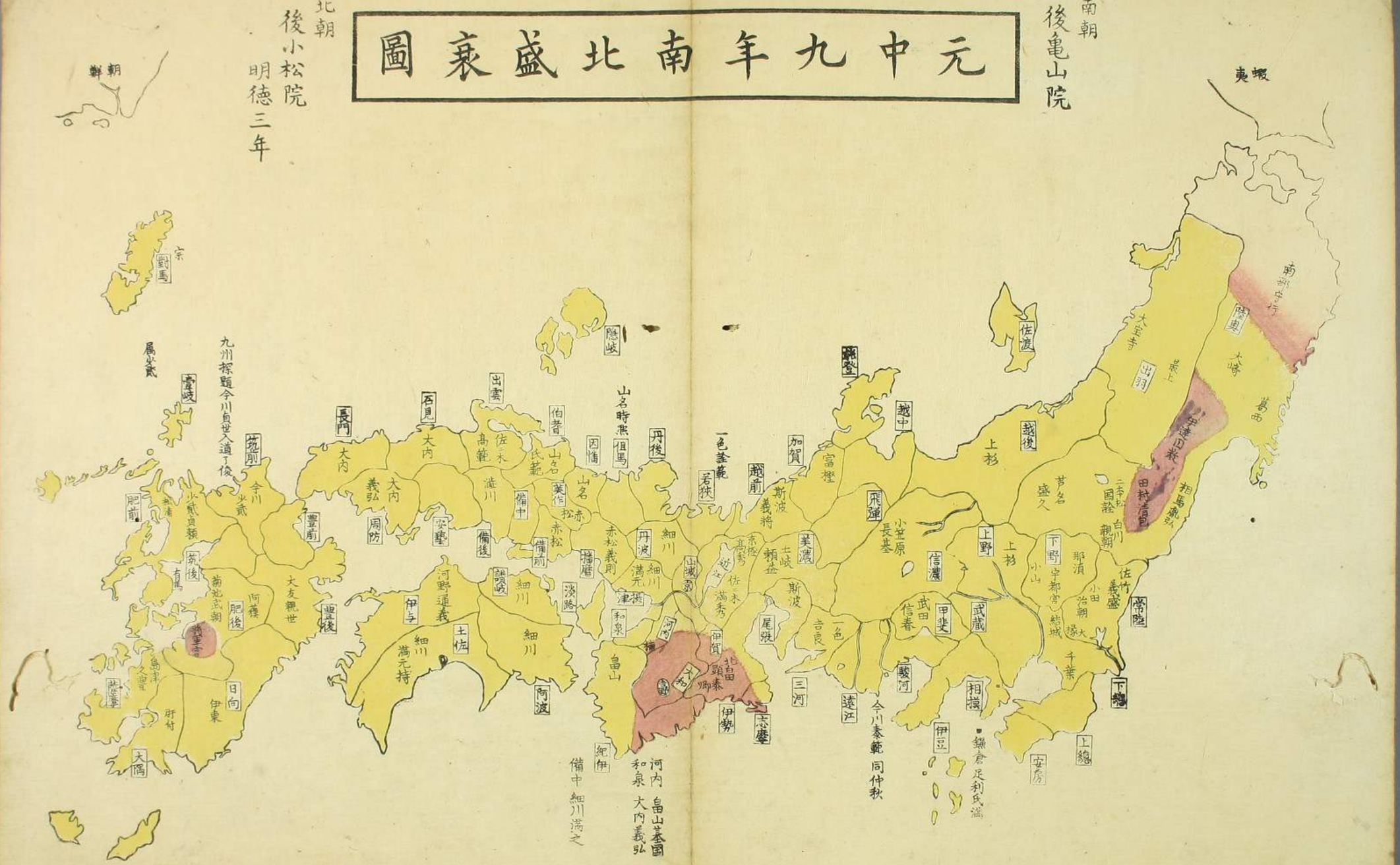
九州再興事所被憑思食也此時分挙義
兵者豊後日向両国守護職并肥後国八
代荘河尻一跡三船一跡海東一跡并豊
田荘等事可被知行由依　征西大将軍
宮仰執達如件　　實綱
元中十年二月九日　　左中将判

阿蘇大宮司殿

元中九年南北盛衰圖

南朝 後亀山院

北朝 後小松院 明徳三年



應仁元年東西干戈圖

應永元年義滿公將軍職を嫡子義持公ゆづる此時かゝ妾ありといへども吾革やまず其嗣義量將軍早世より後義教公義滿公の三男なれども是俗にて獄と號ず性質嚴刻みゝく刑罰を專らにせゝ故庶子を恨み諸國騷亂起る關東乃執權持氏はゆ魚の長子執事上杉憲實と隙あり將軍ひとり通鑑を亡さんと乞し故上杉を助けゝ吾を東国へ下す○永享十一年持氏戰敗して自殺すすれども憲實を寵東乃管領とし上杉を今度の弓矢本意より出ざれば如かく道世ゝ第清方監國せ○赤吉元年赤松滿祐入道性具義教公を弑して播州に接る京軍これを攻ゝ克ず終る小山名持豊但馬より討入て滿祐を誅すその賞として關西を與へ義勝將軍立ゝ同ゝ天世ゝ宮義政公嗣ぐ○寛德元年事東國穏なるゝ故より奮后乃諸侯任せ故持氏の末子成氏を主督ゝ憲實乃を憲忠と管位ゝ諸ゝむ願后成氏父れ仇なりゆえ憲忠誅せゝうバ國乃孤孰る○長禄元年將軍義政知を總領ゝ上杉と共に成氏を討むゝ義政公温柔にゝ風雅を好むといへども政ゝ怠て衡量事なゝ

今年細川勝元山名宗全入る相を事ひ京師乃東西ゝ各十餘萬兵城擁し拠み戦おれと世ゝ應仁乃大乱といふ此軍數年を經る故ゝ花洛を荒涼乃地とかゝ○赤松政則を遣ゝ山名を戦ひ攻摩倶前れ奮傾城後せ○文明四年將軍政の獄を世子義尚公ゆ譲ゝ後年東ゝ下ゝ國居す○同五年三月宗全病死せ勝元も同八月小逝去ゝ長子政元その衆を領ゝ山名黨ゝ者多ゝ○同九年東西乃軍散ゝて京畿せ靜なりゆへども諸國ゝ劫掠ゝ亂る○長享元年江州の六角高頼類す將軍ゝ攻城せ○翌年ハ兩上杉孤實山名年稍ゝ成氏方と東國三分せ○同二年本願寺門徒加賀城打從へ德登越中を既ゝ侯せむゝ年此戦ゝ富樫政親か訴ぶ○延德元年義尚公薨せ嗣子義稙卿義政の才と將軍ゝ○同二年政知伊豆乃堀越ゝ移逝せ北條長氏伊豆を攻ゝ○明應二年畠山義材類く將軍細代乃ゝ河内ゝ出陣せ拠ゝ細川政元常宅ゝ攻ゝ其黨と義稙ゝ越中ゝ遁ゝ政元義澄卿政知の息と立ゝ近國を討平ゝ○同六年成氏古河ゝ逝ゝ嫡子政氏継ゝ

應仁元年東西干戈圖

後土御門院

永正六年両營二川分爭圖

出れより先管領細川政元ハ九條政基公乃公達城昔より一條を
分く其後又同氏成之ハ子澄元と養ひくまとし○永正四年政元ハ
為り害せらる香西元長ハ澄元を主とし三好長輝ハ澄元と立て合戦
者両敗死し澄元自殺せ此孔よ京師ハ周防乃大内義興前将軍義稙
ハ澄元を誘ひ大軍を起し上洛せ細川高国も亦小遊し乃ち義澄卿義ひ
澄元京師を出奔せ義稙卿入京ハ又ハ将軍ハ復義澄ハ
その政を掌る

今歳永正六年長尾為景ハ京師を上杉房能を殺して新潟を攻ふ○同七年上
杉顕実入乃可清弁越後を攻り於て為景と合戦し敗死せ養子憲房管
領を継○同十六年北条早雲氏乃卒し長子氏綱嗣ぐ○同十七年三好
長輝京を攻く克ハ乃両子と共ハ討る○出雲守護尼子経久術く崇ん
ふ〻く近國侵略し大内と爭戦す○大永元年義稙乃ハ国と不和なる
ゆへ京を出り淡路に移る於て国お為軍義澄乃婿子義晴卿を

むかへ将軍とす○同二年前将軍義稙卿阿波に於て薨す○三好長
慶故澄元乃子時元を生て高国と合戦せ高国入道為春毎度利なき故
浦上村宗とその婿浦上政宗ハ播乃勢を復不し播州を出陣し時
元三好と共に加担し敗績し常植村宗ハ死亡す長慶大功ある
り其の威三軍ハ高し時元ハ長慶を忌て殺しかゝる

土佐乃国ハ元来細川家の管領するところなり
志摩乃国ハ両細川のあらそひ乃地なり
監ハ元来山中氏乃領地なり国人者ひ不拠たる
う山名藝予山名お誘して一條房家ハ怒多
乃ち諸し盟とせ〻ハ国中術く移遷す

永正六年両營二川分争圖

後柏原院

弘治二年列國割據圖

京都騒乱よりこの将軍義晴公こられを避て北江州朽木ふなり○天文元年細川晴元三好長基入道海雲を救ふ○同七年北條氏綱氏康父子下総国古府葛に出て足利義明入乃氏の二男は安房上総の小弓と称す里見義堯安房を攻ふ義明討死をもとより氏綱乃威武遠をふり振ひ小弓城を攻ふ○同十年より逝去を氏康勇ひく愈北地を虜む○同十一年毛尾為京越守に攻入て敗死す○同十四年義晴公将軍職を世子義藤つゝ譲る義輝と改細川晴元三好長慶と戦ふ屈敗し緑若乃ふ角義賢を援を仗とす○同十六年安藤通三秀政その守護武蔵を逐て英法をうばふ○同十九年前将軍義晴公江州にてふく薨去○同二十年陶晴賢を大内義隆乃子と称し大友義鎮乃弟義長を迎へて主とし接柄を恣まゝ○大友義鎮肥後を定む○上杉憲政憲房の子管領氏康と戦頁年越後を逐て長尾景虎小倚り後その家臣となゆゝ

今年弘治二年将軍義輝卿いまゝ江州より上京○陶晴賢大兵を率して安芸毛利元就を伐ち厳島より渡海して大内を敗て自殺を元就乃婿の隆元次男小弓川隆景三男吉川元春とをに勇略あり此一戦より近国風靡をみく降参す連ひて周防長門せんのゝ国大内義長防禦の策弱を自滅を毛利それより居子晴久の嫡孫中地滅ひ北ひく たゝかひ多○同三年将軍義輝つ之好と和睦ゝのひ京都より帰る長慶畿内南海北陸を支持り○永禄元年元就備中備後を略す○同三年今川義元兵威強く後遠参れ軍を率ひく尾州を攻ふ織田信長猛勢き義元義元桶狭間に討死すゝ信長北武名かゝれおく たゝ称をよ古の名〳〵○毛利大友と昔前より対戦を○上杉景虎大軍して小原城攻ふ上州より武蔵を入て望を乃妻小田原城攻む関東北諸侯これ北の驕令を従ひ兵勢振さうむ者

弘治二年列國割據圖

後奈良院

永禄十一年足利更替圖

永禄七年三好長慶逝去し嫡子義継十歳の一存のみ我れ家をつぐ一族長慶の男
冒三人流と号し兵権を執りて将軍義輝公を陵ぎ○同八年三
好が党にて小室町の館を攻義輝公勇戦し遂に自殺を図る
三好の党阿波より義栄をむかへて立て義輝公の弟義雄のみ
将軍職位を○松永久秀は長慶存生中恪勤ありしが三人衆と不
和にして合戦に及ぶ河内の畠山高政を松永は助勢す○尼子義久
晴久の毛利の圧迫に屈し東数手術ほとんど陥る○同十年三好
義継その一族と不和松永と合体し
今年永禄の春信長伊勢を伐○同じき秋信長義昭卿を義輝公の弟
供奉して上洛承禎義賢入洛を攻く江南城陥す兄と同じく三好は退
きて河内に法華寺を構る信長はもむく京に入る吾をはらんを邦
と共に義昭卿立ての後将軍に任ず信長は同十月に帰国し
又会稽伊勢に出て越郡を暑す国司北畠具教は和議ありて信

長の子息信雄を猶子とす○六月甲斐の武田晴信入道信玄今川氏
真と遂て駿河城取る　奉州に約して遠江をわかち治む○毛利
元就はたびたび豊筑に兵城渡して大友義鎮と対陣す其虚城う
かがう尼子の高倉山中幸盛尼子勝久を中心として主将とし出雲
に起り又備前の宇喜多直家を使中城侵す
翌十二年勝久雲伯隠岐三州を復す　○同年の冬毛利元就の孫輝元陸奥の子
陣　○元亀元年輝元元就の孫陸奥の子兵城出して勝久と攻　○宇喜多直家
は美作の浦上宗景と半くうひしの毛利に降りて援を乞
○同二年元就逝去にて輝元その業成る　○同三年輝元雲伯
の州敵を暑に勝久敗し帰因幡に去る　○土佐の長曽我祢元親強く
強くして近隣を侵せ侵す

永祿十一年足利更替圖

正親町院

天正五年雄傑爭衡圖

将軍義昭卿ゝ恃勢悪く信長ゝ在て我の制伏うゝ欲て毛を涂く憤て
天正元年石山寺に城壘を構へ〻楯籠ゝ信長将士を遣りて攻戦
責破る義昭卿紀州ゝ退走す同四月武田信玄卒し勝頼その家を継ぐ
○信長江北越前を伐て朝倉義景浅井長政を亡ぼす○吉川元春因
幡伯耆を攻む両山名毛利ゝ従ふ○同二年耀虎入道逼仏越中ゝ
討入て能登を取る○同三年義昭卿中國ゝ列て毛利と謀む輝元これ
よりて京師へ護送ゝ兵戈停ル○同四年信長泉州岸和ゝ江州安土
乃城ゝ移る其後柴田勝家ゝ命じ加賀ゝ討ゝ越羽柴秀吉と
播州へ向て山陽を略し中国
今歳天正五年宇喜多直家浦上宗景と合戦し小早川隆景宇喜多氏さ
を助て浦上を破て美作ゝ攻ゝ宗景これより復亡ぶ羽柴を通ず
○日向乃伊東義祐牧年薩州の島津義久と地を争む〻叛反あり
戦ひ敗し豊後ゝ去て大友ゝ傍る○同六年三月上杉謙信逝去ル

養子景虎（小家氏康の子）景勝（一族成家の子 謙信の外甥）迭跡を争ひ戦ゝ合戦ゝ及ぶ武田勝
頼加勢して景虎自殺す○信長摂津細川藤孝ゝ命して一色氏を伐ち
丹後を略さしむ○秀吉播州ゝ赴く尼子勝久ゝ上月乃城を守らしむ
隆景元春大軍戦ひ敗れを図む信忠摂津荒木の後援とし為
向ひ〻の地利便あ〻ゝ於ては軍を班ける猪久術尽く自殺し
山中幸盛ハ途中ゝ捕ゝ対る○大友義鎮伊東祐兼入の手免薩州と戦ひ
て敗績を重ゝ九州乃うち大友ゝ勢むくるの兵し○長宗我
部元親阿波讃岐を略て三好存保防戦して利あ〻ず○羽柴毛利中
但馬因幡ゝ攻る○猪熊上州ゝ出張して北條方れ諸城を陥て○肥前
乃龍造寺隆信勇猛ゝ〻両筑把ゝ攻入て大友侍津と鼎足の勢
をかひとなす○同七年信長ゝ惟任光秀ゝ命し丹波を攻らしむ
波多野秀治ゝ従ず○此年宇喜多直家卒ル

天正五年雄傑争衡圖

正親町院

天正十年平氏全盛圖

今歳二月信長ゐ武田を伐信忠ゐゐ先達て発向あり美濃信濃乃諸城を下し進んで甲州ゐ発入る勝頼敗走し天目山にて戦死す同三月信長公も既に到着ありて渡川一番の功績賞し上野一国ゐ住州佐久郡等とあたへ関東北陸軍事を統領せしむ甲信駿遠四郡乃地も又おのゝ頒ち授く ○柴田勝家森長一と道をゝけて上杉を伐ち景勝も信濃越中にて合戦も ○同四月羽柴秀吉備中ゐせめ入も毛利と對陣し家康も戎安土ゐゐ伐く惟任光秀池田信輝等をば丹羽長秀等をもて攻入四国北畠織田を討しむ信長公も徳川京師ゐ出陣乃ありし京師ゐ同六月二日の曉惟任光秀叛逆し本能寺を信長公ハ旗鉾布施寺を焼ひて自殺を信忠卿も妙覚寺ゐ出ゐ二條ゐ於て戦死しぬ

こゝ変事を聞く諸國大ゐ擾乱也

爰に羽柴秀吉は毛利也備中ゐ対陣せしゐ和議しく摂州ゐ

信孝長秀おゝびゐ中川清秀高山長房乃兵も會し山崎ゐ惟任光合戦も光秀大ゐ敗しく小栗栖ゐ至て農兵の為ゐ討る也ゐ秀吉乃威名をふるく ○此乃急報伝ひ長曾我部元親阿波をせめ取も伊豫を侵す小笠原貞慶も未曾我昌を逐ひ撃て信濃の本領をとりかへす ○秀吉故信忠卿乃幼息三法師丸後ゐ秀信と号て嗣ゐ立し

世法兵庫頭勝 ○同十一年信孝勝家尾張越前より出ゐ秀吉を伐つ。みれ共しく不利ゐ羽柴乃猛勢ゐ強大ゐて秀吉加州前田利家乃雄略すぐれたるを頼く北州の総統ゐ ○同十二年羽柴大軍を伊勢ゐ打入も諸城を下しく尾張ゐ向かゝく援兵を

後遠ゐ清ゐその孤弱を憐ひく意しゐ信雄乃力微ゐて防戦

四月秀吉尾州ゐ帰しく冬州城侵し小牧長久ゐ陣ゐて大ゐ

敗績を世のゝち和睦せしのひら第ゐ

天正十年平氏全盛圖

正親町院

朝鮮

蝦夷

蠣崎改松前

宗義智

對馬

今年松浦鎮信取壹岐

壹岐

松浦

肥前

龍造寺隆信

筑後

有馬

肥後

島津義久

薩摩

大隅

日向

大友宗麟義統

豊後

筑前

秋月

豊前

長門

周防

石見

安藝

毛利輝元

吉川元春

小早川隆景

出雲

尼子

河野通直

伊予

土佐

長宗我部元親

備後

備中

備前

讃岐

三好存保

阿波

但馬

因幡

伯耆

美作

丹後

丹波

羽柴秀吉

播磨

淡路

摂津

和泉

根来

紀伊

河内

筒井順慶

大和

山城

近江

信長公

甲賀

信雄卿

伊勢

志摩

尾張

三河

遠江

甲斐

河尻鎮吉

武田信君

駿河

伊豆

相模

武蔵

北條氏政

上野

北條

上杉景勝

佐渡

越後

越中

能登

前田利家

加賀

柴田勝家

越前

佐々成政

姉小路自綱

後藤金森長近

飛騨

木曽

美濃

信濃

森長一

上杉

細川藤孝

丹羽長秀

若狭

隱岐

出羽

最上義光

政宗

陸奥

大崎義隆

南部信直

秋田愛季

小野寺

津軽為信

芦名盛隆

白川

田村

岩城

伊達

那須

佐竹義重

下野

宇都宮

常陸

結城晴朝

古河義氏朝臣此歳逝去

下總

上總

安房

里見義頼

天正十四年 豊臣征遠圖

去ねんを正十二月より龍造寺隆信と因幡原乃有馬晴純入道仙巣を攻けるふよりく薩州より援兵つゝ隆信不意小戦死の後鴻津乃兵勢いよ〳〵強く且義久の全弟義弘驍勇絶倫ふ〳〵ゆゑ所らぎるふ〳〵時は大友れ一族立花鑑連入乃紙く兵と用ゆる故より此在世のうちハ敵軍考ゆるふ及ぐす又隆信没後その子政家嗣く鍋島直茂乃ゆ武略を免ぐらゝふより全く領地を保てゝ

○今年天正十四年義弘肥後より筑後を略し宰府ふうち入除秋月種実もこれ〳〵義久大友義統義統入乃家嫡の老子援軍城京師より後ふおひく西征乃議あり山陽南海の軍馬をゝく先進て義向せむ 同十二月鴻津勢考後ふ丸入す義統豊前へ退く○拠るゝ義久筑後寺乃兵肥後へ攻入て小早川ふれ諸軍敗ゝ考ゆ〳〵波海せゝゆく義弘ふ令して軍城ゆ〳〵さゝ

暦十六年乃春関白秀吉公出陣乃ゝ大軍乃到ることゝ乃或々やぞれあるひゝ降るゝんぐ薩州ゝ対入て合戦乃ゝ敗く鴻津勢敗し芳れぞ九州ゝれ平均て○同十六年肥後年楢乃ゝ対つき佐く成政誅ゝ依し我の領地を加友清正小西行長ゝ授く○同十七年奥州乃伊達政宗ゝ会津の芦名義広を逐くれの地成侯せ武威東州ゝ及ぶふ常陸乃佐竹義重兵馬強く北條伊達と隣とゝ乃ゝ出羽の最上義光と又一方れ雄と称し○同十八年考后関白小原氏と伐つ氏政逐ゝ滅亡し奥羽ふ残際ゆぐ善く平治せゝ

文禄元年三月より豹鮮征伐の師起ゆく八道乃州縣大半踏りその国を事略と存く出走ゝ我会釈を進むぐ明国を討伐せんゆゝ努し〳〵神宗帝甚驚怒邪錯雷如れふゝ大家と智し朝鮮を援けく防戦ゝ志ゝ乃ゝ慶長三年八月豊臣太閤薨去乃ゝ諸将ゝれ皆陣考

天正十四年豐臣征遠圖

正親町院

元和元年四海一統萬代肇基圖

慶長五年八月關原乃役ありて寰宇悉く
英武に帰せ同十九年の冬難波の事ありしかども
今歳元和五月みなもとすみ国のみ平定し光より永く
一統に属せり柿葉條ふ述ぶかくよ乃保元平治の亂を
始とし鎌倉室町の時代より天正文禄慶長頃まで
数百年乃間割據せし地勢この国ありて久しく干戈
やむことなかりしに生民久しく兵燹乃難に苦しみ
に廣大なる
神武寛仁乃盛德よりて海内安寧に治ま
ひ恩化を蒙ること既に二百余年天下ますます泰
平にして文武共道あらび行はれの聲ん物ること萬
年世と共ともかぎりなく国説なり
ところ変にそなはりまし
みぎりに拙記たてまつる

元和元年四海一統萬代肇基圖

後水尾院

編圖紙狹故列國諸侯不能悉載
于此矣只撮當時所領之高知或
其邦圖有餘帝者而概記焉

盤松軒蔵版

文化十二年龍集癸亥孟夏念五日

神田鍛冶町二丁目
北島長四郎

采秋園所輯發兌書目

日本橋通一町目
須原屋茂兵衛

國郡建置畧說

折本 一帖

定まる間の沿革を待ずしてもくもの本邦の分國なりしを殺也しくるもち上古より形勢を一統にして定せる孫書也

新撰花押譜 全七冊

五武の花押（つきなし）諸家書畫茶人の樂より動ちと古来の押ものれ出ちと出ん